

## 生活科教科主張

### 1. 生活科における学び

私たちは、身近な人、社会及び自然という対象を自分とのつながりで考え、自分や友達の見方や考え方を生かして、生活を豊かにしていこうとすることが生活科における学びと考える。

対象に出合った子どもはそれぞれのやり方で自ら対象と関わっていく。対象とくり返し関わる中で「もっと〇〇したい」と自分の思いをもった子どもは、先行経験や活動を通して得た見方や考え方を生かしながら、思いの実現に向かって主体的に活動する。その過程で、意識していなかったことが気付きとして自覚化されたり、一人ひとりの気付きが関連付けられて新たな気付きが生まれたりして、気付きの質が高まっていく。活動する中で満足感や達成感、自信等を得た子どもは、日々の生活や次の活動への意欲や期待を高め、自分自身の成長にも気付いていく。

このような経験をくり返すことで、主体的に取り組んだり、挑戦したりしようとする原動力が生まれていく。そして自ら対象に働きかけていく中で、自分の見方や考え方を広げたり人との関わりを深めたりして、生活を豊かにしていくと考える。

### 2. 本校生活科部が考える『その子らしく学ぶ』

私たちは「その子の背景や、活動の中で生まれた見方や考え方をもとに、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かうこと」を生活科における『その子らしく学ぶ』であると考えている。

まず、対象に出合った子どもは、「知りたい」「やってみたい」と思い、自ら対象と関わっていく。そこには、その子の知識や先行経験、見方や考え方などが影響しているだろう。そして対象とくり返し関わることで、思いが生まれたり膨らんだりしながら、自分のやりたいことを明確にして、学んでいく。

自分と対象とを結びつける中で、子どもは自分を軸にして学びを進めていく。「もっと〇〇したい」と思いをもった子どもがその子ならではのやり方で対象と関わることで、その子ならではの気付きが生まれる。その気付きをもとに子どもはさらに対象と関わったり試行錯誤を重ねたりして、思いの実現に向かっていく。

自分の思いの実現に向かう中で、友達と気付きや考えを共有することもある。友達と「もっと〇〇したい」という思いを伝え合ったり高め合ったりして、その子の見方や考え方は広がっていくだろう。そして「自分が本当にやりたいことは何だろう」と吟味したり見つめ直したりして、その子はその時にはたらかせる見方や考え方が焦点化されていく。

このようにして思いの実現に向かうことは、生活科の学びを得ていくことにつながると考えている。

### 3. 『その子らしく学ぶ』子どもを支える環境設定

#### (1) 対象との魅力的な出会い

子どもにとって身近な人・もの・ことを対象として単元を構想する。子どもが「知りたい」「やってみたい」と思えるように、対象に触れたり、体験したりする場を設定する。

#### (2) 気付きの自覚化、高まりへとつなげる活動

同じ思いをもつ友達との活動や、多様な思いをもつ友達との活動など、自発的に協働する学習活動を支えていく。その中で新たな気付きが生まれたり、一人ひとりの気付きが関連付けられたりするように活動の歩みを視覚化する。

また、言葉や絵や動作、劇化等、子どもの思いに沿った多様な表現方法を取り入れていくことで、子どもが気付きを自覚したり、気付いたことを振り返ったりできるようにしていく。

#### (3) 子どもが思いを実現できる場や振り返りの場の工夫

子どもが、気付きから新たな思いや気付きにつなげられるように、いつでも思いをもって試したり対象とくり返し関わったりできる場を設定する。

振り返りの視点を明確に示すことや、写真や動画、感想等を提示することで、自分自身の成長に気付いていくことができるようにする。

#### (4) 「その子らしさ」をより深くとらえる教師

その子の「こうなりたい」という伸びようとする芽をとらえることも、『その子らしく学ぶ』子どもの姿を生み出したり支えたりする上で大切なものであると考える。今見えている「その子らしさ」だけでなく、その子になりたいと思う姿にも教師が思いを馳せることで、材との出会いやその子が壁にぶつかったときの支え方を工夫することができるのではないか。

## 1. はじめに

私たちは、身近な人・自然・社会という対象を自分とのつながりで考え、自分や友達の見方や考え方を生かして、生活を豊かにしていこうとすることが生活科における学びと考えている。

これまでの実践から『その子らしく学ぶ』具体的な姿を見出し、生活科における『その子らしく学ぶ』とは、「その子の背景や、活動の中で生まれた見方や考え方をもとに、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かうこと」であると考えた。『その子らしく学ぶ』過程で、その子のやりたいことが焦点化されていき、はっきりとした意思をもったその子の学びが生まれていると感じ、やりたいことが明確になっていることがその子の学びの大きな支えになっていくという可能性も見えた。

研究2年次では「その子が、自分と対象とを結びつけながら進んでいく」という見方で子どもの学びの実際を見つめてきた。2人の抽出児の学びのプロセスからは、それぞれに自分を軸にしながら対象と関わり、思いの実現に向かっていく姿を見ることができた。その時その子が働かせている見方や考え方は、その子の背景はもちろん、活動の中でも材や友達といった対象から気付きを得て生まれているものも多くあり、やはり「その子の背景や、活動の中で生まれた見方や考え方をもとにしている」ととらえることができた。そして、「その子がやりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かうこと」は、生活科の学びを得ていくことにつながっていった。

## 2. 研究の目的と方法

私たちは、子どもの「心の動きを伴う経験によって、その子に還るもの」という視点をもって学びのプロセスを追うことで、生活科において『その子らしく学ぶ』価値や可能性をより明確にしていきたいと考えた。子どもの中でやりたいことが明確になっていく様子、つまり、その子の見方や考え方をもとにそれぞれのやり方で自ら動き出していく様子や、子どもがやりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かっていく様子に着目しながら、そのようなあらわれに至る原点となっているものを探り、子どもの「心の動きを伴う経験によって、その子に還るもの」を視点として、学びのプロセスを分析していくこととした。そこで本稿に挙げる実践では、子どもの発言や行動、ワークシート、創作物等を分析の資料とし、その子の思いやその背景にあるもの、思いの実現に向かう中でその子に生まれている学びを検証していく。特に、研究3年次は学びのプロセスにおける「心の動きを伴う経験」を根拠として「その子に還るもの」を見出すために、抽出児の様子を動画で記録し、発言や表情、視線の先にあるものや、仲間の発言に対する反応の変化等まで分析していった。また、抽出児だけに限らず、その子を取り巻く子どもの姿にも目を向けていった。

## 3. 研究の内容

### (1) 2年「ピンポン玉パーク」(自然や物を使った遊び)

#### ①単元の概要について

本学級の子どもは、これまでの生活科で「シャボン玉遊び」を経験してきた。それぞれの「〇〇なシャボン玉を作りたい」という思いの実現に向かっていった。同じ目的の友達と一緒にシャボン液に絵の具を混ぜたり、息の入れ方を変えシャボン玉を膨らませたりしながら何度も試す姿もあった。試行錯誤をする中で少しずつ自分の作りたいシャボン玉の形を明確にもち取り組む姿を見せ、自分の見方や考え方を広げながら経験を積み重ねてきた。このように、自分の思いの実現に向かう経験や、その過程を通して、子どもは友達との共有から新しい思いをもったり、一緒に活動する楽しさを感じたりする考えた。そしてその子の背景や、見方や考え方をもとに、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かうことを願い、本単元を構想した。

本単元では、プラスチック段ボール(以下「プラ段」という)の上にピンポン玉を転がす遊びをつくる

活動を行った。どうすれば転がるのかを考え試行錯誤を重ね、友達の作ったもので遊んだり、自分の作ったものと友達の作ったものを比べたりしながらピンポン玉という転がる対象に自ら働きかける活動の中で、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向けて進んでいくことができるよう活動を設定した。

第①時では、多目的ホールに様々な方法で設置されたプラ段と出合った。壁に設置されたものや、傾斜になっているもの、床に置かれたものなどがあるプラ段の上にピンポン玉を転がした。その中で友達とどこまで転がるか競ったり、誰のピンポン玉が最後までプラ段の上に残っているか試したりした。その中で子どもはピンポン玉の転がり方に目を向け、もっと複雑に転がすために材料を用意したいと考えた。第②時は、一人に1枚のプラ段とピンポン玉を渡した。前時での経験から、壁に貼り付けたり傾斜にしたりしながら、よりおもしろさや楽しさを目指した子どもは、教師が用意したトイレットペーパーの芯や画用紙に加え、自分で用意した材料なども使い、転がる遊びを制作していった。第③④時では、前時からつくり始めた遊びの制作を行った。これまで「ピタゴラスイッチにしたい」「迷路にしたい」と思いを広くもっていた子どもが、試行錯誤しながらつくっていく中で「レールをたくさんつけて長い時間転がるようにしたい」「レールからレールに飛び移るダイナミックな遊びにしたい」というように思いを明確にもつようになっていった。第⑤時では、今つくっている遊びが完成したらどうしたいかを考える作戦会議を行った。話し合いでは、「相棒さん呼びたい」「他のクラスの2年生に遊んでもらいたい」といった誰かを招待したいという思いが出た。そこでクラスとしての最終目標を「相棒さんを招待すること」に設定した。また、招待するためには、「今よりももっとピンポン玉パークを楽しいものにしたい」と考え、アイデアを出す様子があった。招待する相手をイメージすることで「もっと複雑に転がる遊びにしたい」「入口に門を作って本物の遊園地みたいになりたい」というように更に思いを明確にする姿があった。第⑥⑦時ではピンポン玉パークの完成を目指し活動を行った。作戦会議を経て、より楽しい遊びにするためにレールや壁の付け方を変えたり、よりゲーム性の高いものを目指して得点の仕組みをつくり替えたりと試行錯誤をしていった。レバーで動くレールを作りたいと思い何度も作り直したが、その先のレールにピンポン玉を上手に載せられず悩む子どももいた。そういった困り感のある子どもに「レールの大きさ」や「プラ段を設置する高さ」などについて教師は投げかけながら関わっていった。また、友達の遊びからヒントを得て自分の遊びに取り入れる様子もあった。上手くいかないことを解消するために遊び方を大きく変えた子どももいた。

第⑧時では相棒学年の5年生を招待したり、友達の作ったピンポン玉パークで自分自身も遊んだりする活動を行った。自分が遊ぶだけでなく、相棒さんに自分がつくった遊びのポイントを紹介したり、友達の遊びの楽しいところを共有したりする姿があった。友達や相棒さんから感想をもらったり、遊ぶ中で友達の笑顔を見たりすることで、自分のアイデアが形になっていることを実感して、それをよかったと感じ、満足感を得た子どもが多かった。第⑨時では、単元全体の振り返りを行った。自分がつくった遊びを相棒さんが楽しんでくれたことに対する満足感を表出する子どもや、自分の目指した遊びに対して「もうすこし〇〇すればよかった」と感じる子どももいた。友達から感想をもらったり、遊ぶ中で友達の笑顔を見たりすることで、自分のアイデアを形にしてよかったと感じ、自分の頑張りや工夫したことが実現することのよさに気付いていた。

## ②抽出児 A 男の学びのプロセス

### ア「対象に対して何度も関わる中で、自分の思いを強く明確にしていく」

A 男は第①時で、ピンポン玉とプラ段に出合い、様々な転がし方を試していった。プラ段の坂の上からどこまで転がるかといったものや、複数の友達と一緒に1枚のプラ段を持ち、最後までプラ段の上に残るピンポン玉はどれかといった遊びを行った。様々な転がり方をするに気が付き、その一つ一つに興味をもって試す様子があった。「一緒にやる。次はここからレースみたいに。どこまで行ったかやろ」というA男の発言からも分かるように、ピンポン玉がどの程度転がるものなのかを感覚的に掴んでいった。また、同じ位置から転がしてもその時々で異なる転がり方をするピンポン玉の様子から「楽しいぞ！」

「もう一回やろう！」と発言し、転がすことのおもしろさに気付く様子もあった。一緒に遊ぶ友達に対して「次はこっちからだ。もっと上にして」と自ら働きかける様子も見られた。

第②時では、前時と異なり自らピンポン玉とプラ段に働きかけるのではなく、友達の後ろを歩き付いていく様子が見られた。友達のつくっている遊びを見たり、一緒にレールを取り付けたりはするものの、友達の思いがありそうなところには、A 男の具体的な「〇〇したい」という思いを強く出さなかった。やりたいことが明確にならず、悩む様子があった A 男だが、授業終盤に誰も使っていないプラ段を発見した。自分のものを作れるという安心感をもった A 男は「なんでここ全然やってないの。じゃあやるか」とそこで自分の遊びを進めていくことを決め、材との結びつきが再び強くなっていった。自分の遊びを作る場所が決まったことで「お皿ちょうだい！」「ガムテープちょうだい！」と友達や教師に声を掛けていた。自分のやってみたいことが表現できる場が確保されたことにより、A 男のなかの「〇〇したい」が少しずつ芽生えていたのだろう。

第③④時では、自分の場所が確保されたことにより、積極的にプラ段にはたらきかける様子が見られた。前時までは「僕何も持ってこなかった」と言っていた A 男だが、紙コップやアルミホイルの箱などを用意し、迷うことなくそれらを貼っていく様子が見られた。そして「ちょっとやってみるか。おお！楽しい！」と何度も試しながらレールを取り付けた。その中でレールからレールへと飛び移るピンポン玉の動きに着目し、A 男は「ダイナミック」をキーワードに活動を進めていく。ダイナミックさを目指し、レールを何度も付け直し試行錯誤する中で自分が目指したものが形になることに楽しさを見出し「おもしろくなってきた！」という発言を何度もしていた。第⑤時では、話し合い活動の中で相棒学年である 5 年生を招待することになると、「来てよかったと思ってほしい」という友達の考えに共感し、5 年生を喜ばせるために「もっとダイナミックになるようにしたい」と自分の思いをより強くしていく様子が見られた。第⑥⑦時では、自分の遊びの完成を目指す中で「うーし！始めるぞ！強化すんぞこれを」とダイナミックになるようにすることを貫き通して強化することで 5 年生に喜んでもらえるようによりレベルアップした遊びにしようと意気込む様子が見られた。自分の目指すダイナミックさができると友達や教師に「ねえ、ここから始めてここから！こういって！こういって！」と試してもらい相手の反応を得ようとする姿や、「こっちはね A 男ゾーン。牛乳パックもね、紙コップもね、ほとんどぼくの材料」「ここの店長はねえ、ぼくなんだよ」と自分が作ったことをアピールする様子も見られた。第③時以降、A 男の中で「ダイナミックな遊びにしたい」という思いが、活動をする中で徐々に強く明確になっていることが分かる。第⑧時では、相棒学年である 5 年生を招待した。A 男は自分の相棒さんに、自分のつくった遊びを「ここなんですけど、さあ、転がしてください」「ここからもやってください。ありゃま。じゃあ、牛乳パックから、次は…」と紹介したり、「ここに入っただけでも千点。千点…いけいけー！お！行った行ったー！」と相棒が遊んでいる姿と自分の目指してきたものとの重なりを感じることで A 男は興奮し、実況中継のように言葉を発したりしていた。A 男が目指していたダイナミックな遊びを自分だけでなく、他者も楽しんでいるという事実が A 男にとっての満足感につながったのだろう。

これらのことから、対象であるピンポン玉にくり返し関わる中で、自分のやりたい「ダイナミック」という思いを強く明確にしていっていただと考えられる。思い通りに転がる仕掛けを作れたときには喜び、更なる仕掛けを作ることに向かい、うまくいかないときには試行錯誤して「どうやったらもっとダイナミックになるだろう」と思いの実現に向かい続けた。このように心の動きがある度に A 男は思いの実現に向かっていった。そういった思いの実現に対して誠実に取り組んでいく姿が、単元の中で見られていた。



図1 「ダイナミック」を目指す A 男

## イ「友達がつくった遊びと出合い、関わることで考えを広げ、対象との関わりを変容させる」

A 男は第③時以降、「ダイナミック」を大きなテーマとして活動を進めていた。それは「ダイナミックになってきた」「もっとダイナミックにしたい」といった発言や振り返りでの記述から読み取ることができる。彼がレールをプラ段に取り付け、何度もピンポン玉を転がす中で生まれた「〇〇したい」という純粋な思いである。これは彼自身の中から生まれたものであり、その後の学びを通して彼が意識していた部分である。しかし、第④時でB 男の考えた得点が入る遊びに出合うことで、A 男は対象との関わりを変容させていた。これまで一心不乱に自分

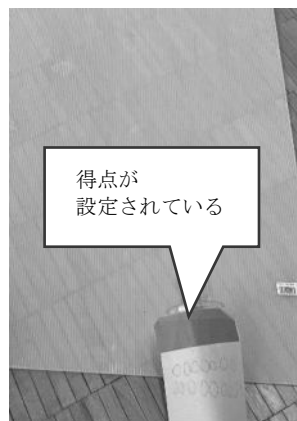


図1-2 B 男の遊び

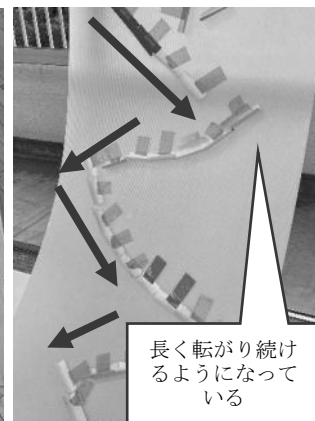


図1-3 C 男の遊び

の中で決めた「ダイナミック」のみを求めてきた A 男だったが、B 男の遊びと出合っで以降、自分の遊びの中に、うまくピンポン玉が転がらず止まってしまう場所や、ピンポン玉があまり転がらない場所にも目を向け、「ここは得点が入るようにしよう」「ここは一億万点だ！」というように自らの遊びに得点という要素を加えていった。また、複数のレールの上を落ちてはつながっていく C 男の遊びに出合った A 男はピンポン玉が長く転がり続けることのよさに気付いた。ところが一緒に活動していた D 男から「プラ段をもう一枚つなげて長くしたい」と言われたときには「うーんどうしようかな。そこまでコース行く(転がり続ける)と思う？」と簡単には受け入れない様子をみせた。悩んだ末に「いいすよ！ここにやって」と受け入れ、プラ段を追加し、つなげていた。B 男や C 男の遊びとの出合いがあったことで、自分の大切にしている「ダイナミックにしたい」という思いにこだわりをもちつつも友達のやりたいことを受け入れ活動に取り入れていくことができたのだろう。第⑨時の単元の振り返りの場面では、「あのさあ、作り方が甘くてピンポン玉がいっぱいコースから落ちてた」「途中らへんで E 男くんみたいなジャンプ台を作りたいと思ったけれど、難しくて、置く場所などの問題があってできなかった。」といった発言があった。また、これまで単元を通し自分が作っているものがベストな形であると考えがちな A 男だったが、友達の遊びとの出合いによって、自分にはない要素を取り入れることが、自分の思い描くダイナミックにもつながるということに気付いていた。友達との関わりによって得られるものに好奇心をもって学びを進める中で、自分の「〇〇したい」をより吟味し、その「〇〇したい」がよりよい形で叶うように A 男にとってよいと思われるアイデアを取り入れていった。このように好奇心をはたらかせて様々な対象と関わることで自分の思いの実現にプラスにはたらくことを経験できたといえる。

このような姿から A 男は、友達がつくった遊びと出合い、関わることで考えを広げ、対象との関わりを変容させていったのだと考えられる。

## ウ「自分を軸として学びを進めていくこと」

第③時以降ダイナミックさを大切にして活動をしていた A 男は、当初一緒に活動していた友達に対しても、「ここに何個か入るようにしたいんだよ！」「ぼくこっち作ってるのに」「つなげないでー。ぼくつなげないでほしいんですけど！」と自分の主張を曲げずに伝えていた。これは、A 男の中で「〇〇したい」という思いが明確にあり、それを大切にして活動を進めようとしていることのあらわれだと考えられる。何度もレールを試行錯誤や対象との関わりをくり返す中で、自分が見つけたよさを大切にしたい、残しておきたいという思いがあっただろう。しかし、単元が進む中で他の場所で遊びをつくる友達の考えにふれ、そのよさに気付くことで、友達との関わり方にも変容が見られた。一緒に活動していた D 男の「木をこ

○	・一緒にやろうというD男からの誘い
	・ダイナミックが表れない場所へのレールの取り付け
	・一緒に活動する友達からプラ段を延長することを提案される
×	・ラップの芯を半分にする →別の場所を提案
	・ダイナミックな箇所を変えようとする提案 →拒否
	・他のグループからのくっつけようとする提案 →拒否

図1-4 A 男が受け入れたものと断ったもの

このように A 男は、友達がつくった遊びと出合い、関わることで考えを広げ、対象との関わりを変容させていったのだと考えられる。

こにくっつけたい」という思いに対して「いいよー」と返事をするなど、だんだんと友達のアイディアを受け入れるようになっていった。受け入れたアイディアを見ていくとA男の大切にしているレールからレールへピンポン玉が飛び移りながら転がる「ダイナミックさ」が損なわれないものが多かった。反対に「ダイナミックさ」が損なわれるようなものに対しては、断る様子があった。また、単元の終盤になるほど、D男との相談が増えている。これは、自分のやりたいことを明確にもっているからこそ、相手の考えも大切に「どうしたら両立できるのか」を思案しているからだと考えることができる。自分を軸にし、ダイナミックさを残しつつもD男のやりたいことも大切にすることが見られた。

このように自分の「〇〇したい」を明確にもち、自分を軸にして学びを進めたA男だからこそ、友達の考えをただ受け入れるのではなく、批判的思考をもち、自分の「〇〇したい」という思いと共存できるのかを考えて学びを進めていくことができたと考える。

## （２）２年「イシガメを育てる、守る、楽しむ」（動植物の飼育・栽培）

### ①単元の概要について

本学級の子どもは、生き物への関心が高い。昆虫やダンゴムシなどの小さい生き物に対して「かわいい」「飼いたい」「一緒に遊びたい」という様々な前向きな思いをもっている。休み時間にはクラスの友達と一緒に観察したり、手に乗せたりして遊ぶ様子もある。身近に生息する生き物に興味をもち、自ら関わりにいっているが、命を扱っているという意識は決して高くない。観察や一緒に遊ぶことに満足すると、虫かごをそのままにして下校してしまったり、餌を与えずいつまでも置いていたりした。また生き物に応じた飼育環境ではなく、その子独自の方法で関わっている姿もあった。「育てたい」という思いがあってもどうすればその生き物にとってよい環境になるのか分からないままになっていたり、それがその生き物にとってベストだと考えていたりしたのだろう。そこには生き物を飼うということが「命を扱う」「最後まで世話をする」ということに結びつくべきであるという認識がまだ十分に育まれていないと受け取れた。

本単元では、４人１組の班に１匹のイシガメを渡し、飼育を行った。子どもは一つの命としてイシガメを迎え入れる中で、どのような環境が飼育にふさわしいか分からない中、目の前にある命を守るために本やインターネットで情報を集めるなどして飼育環境や飼育方法を整えていった。生き物に対する親しみ方が異なる子どもが、様々な価値観をもって話し合い、飼育方法を選択していくことは、イシガメにとってよい飼育環境に近づくだけでなく、子どもにとっても学びになるはずである。動物の特徴、育つ場所、世話の仕方、変化や成長の様子に気付くことに加え、「どうしてほしいのかな」と生き物にとっての最適解を考えるようになってほしい。そして子どもが班で相談し、イシガメに働きかけたり、よりよい飼育環境を目指して試行錯誤したりする中で、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向けて進んでいくことを願い単元を設定した。

第①時で子どもは赤ちゃんイシガメを出会った。イシガメを借りている藤枝市立藤岡小学校の２年生や校長先生によるメッセージを聞いた子どもは、「同じ低学年の子どもが大切に育てていること」や「在来種の貴重なカメであること」を知った。水槽に入ったイシガメを見た子どもの多くは、体の小ささや足をばたばたと動かす様子を見て、そこに「かわいいさ」と感じている様子が見てとれた。また「イシガメを飼ってみたい」と思う子どもも多くいた。そこでイシガメの飼い方について調べる時間を設けることにした。第②③時では、イシガメの生態やイシガメの飼育方法について調べ学習を行った。それらについて本やインターネットで調べる中で、泳ぐための水辺と甲羅を乾燥させるための陸地が必要なことや、甲羅の掃除を人が行う必要があることなどを知った。また、餌は何でも食べるが、偏りは良くないことなどを発見し、班で相談する姿も見られた。調べることで、毎日どんな世話をすればいいのか、何が必要なかが具体的にわかってきた。第④時では、班ごとによるイシガメの飼育を開始した。調べたことを基に、水槽の中の環境を整え、その中で一匹のイシガメを飼育した。前回の調べ学習でイシガメは水中で過ごす時間と陸地で過ごす時間があることを知った子どもは、水槽の中に、砂や小石、レンガの破片などを用いて陸地を作った。しかし、その飼育環境や飼育方法は、まだイシガメの本来

の生態に合うものにはなりきっておらず、イシガメのじたばたしたり餌を食べなかったりする様子から、子どももそのことに気づいていった。そこで第⑤時では、班で行っている飼育方法について情報交換を行った。「餌を食べる量が減っている」「甲羅がぬるぬるする」「水槽が臭い」などの課題が出る中で自分たちの飼育環境や飼育方法がやはりベストでないことに気付くことができた。第⑥時では、第⑤時での話し合いを基に、飼育環境を見直す時間にした。子どもは前回の話し合いから、自分の「〇〇したい」をイシガメのためという前提で考え、「水槽や甲羅を洗ってみよう」と動き出した。これまでの飼育の中で子どもは「イシガメにとって過ごしやすい環境」「自分たちにとって楽しい水槽」という二つの視点をもっていたが、「イシガメのために何ができるのか」という視点に焦点化して活動することができた。第⑦時では、ここまでの振り返りを行った。「最初はイシガメが怖いと思っていたけれど、班のみんなと育てるうちに可愛く感じるようになった」「これからも飼育を続けたい」といったポジティブな意見だけでなく、「水換えを忘れてしまった」「餌の食べ残しが気になる」という新たな課題も出た。課題を解決するために「火曜日と木曜日に水を換える」「朝5粒、昼5粒、帰り8粒の餌をあげる」といった具体案が出され、日常の世話の中で試していくことにした。第⑧時では、第⑦時で考えた案がどの程度できているのか問いかけた。「意識しているけど忘れてしまう」「確認がしづらい」などの課題が出たため、全体で更なる解決策を考えた。「カレンダーに記録すればいいと思うよ」という意見から、各班で記録をつけていくことを決定した班もある。イシガメの飼育が始まる前は、自分本位に生き物と関わっていた子どもが、守るべき存在として在来種であるイシガメの赤ちゃんを飼育する中で、時ににおいなどの不快な思いをする飼育活動であっても、それすら命に働きかける楽しさとして捉え、達成感を得ていた。このように友達と協力して飼育する中で、新たな課題と出会い、それを乗り越える中で喜びや達成感を得る姿が見られた。

## ②抽出児B子のプロセス

### A「対象にくり返し関わる中、芽生えた思い」

第①時でB子は、教室の前方に登場したイシガメに対して「ねえ、見えない!」と興味を示し見ようとする様子があった。各班に1匹のイシガメが配られることを知ると、「じゃあ机の上きれいにしよ!」「あなたもきれいにして絵日記しまつて」と水槽を置くための環境を整えようとしたり、生き物に触れることを不安に思う友達に「絶対大丈夫!水槽の中だから!」と励ましたりする様子が見られた。各班にイシガメが渡されるとすぐ手に乗せようと試みるも「ああくすぐったい!先生!手袋ちょうだい!」とイシガメの手足が触れることによるくすぐったさを避けようとしたり、つかまり立ちをさせ、「立ったあ!」と自分本位に遊んだりする様子が見られた。その背景には、イシガメの小ささや動きのかわいらしさを素直に感じている部分があったと考えられる。第②③時でイシガメの飼育環境や飼育方法を調べる活動を行った際には、イシガメを近くに置いて調べようと「先生ちょうだい」「だってじっくり見た方がよくない?」と進んで取りに行っていた。イシガメを見たい、飼いたいという興味をもち、班の形に席を動かすことを提案したり、資料を読んで分かったことを進んで伝えたりして班の友達を引っ張って動き出していた。本やインターネットなどの資料から情報を集める中では、複数の資料を読み比べ「先生、ここに書いてあることと全く違うことが書いてあるんだけど…」と質問をしていた。そこには、正しい方法を知り、飼育したいというB子の思いが表出していたと考える。イシガメの飼育環境について調べる中で陸地になる石が必要なことを知ったB子は、「こういうさ、でっかいのがいいらしいよ。また探しに行こう。」と同じ班のB子に呼びかけるだけでなく、昼休みに一緒に遊ぶ約束をしていたC子に「C子、今日昼休み遊ばないでもいい?石を探すの。イシガメの石を探すの」と断りを入れる様子もあった。調べ学習を行う中でイシガメを飼いたいという思いが強くなっていったと考えられる。イシガメの飼育をスタートさせた第④時では、前時までに調べたことを基に水槽の中の環境を整えた。イシガメを水槽に入れるとすぐに、餌になる野菜を与え食べさせようとしていた。しかし、B子が思っていたほどイシガメが餌を食べなかったため、「何なら食べるんだろう」と疑問をもった。B子は他の班に聞いたり、ペットボトルで餌箱を作ろうとしたりしていた。これらはイシガメのためというよりも「食べて



いる様子が見たい」というB子自身の「〇〇したい」に起因している行動であったと考えられる。第⑤時で各班の現状について考えたときには「1週間一緒にいたから慣れてくれて、餌もあまり食べなかったけど食べてくれてとても楽しいです。水槽を換えてほしいのか分からないけど、大きい石の上に立って手(前足)をふったり体をくっつけたりします。水を換えるとすいすい泳いでとても気持ちよさそうなので、これからもこのまま過ごそうと思います。」とワークシートに記述していた。飼育できたこと、食べないと悩んでいた餌を食べてくれたことに対して一定の満足感をもっており、飼育環境や飼育方法についての課題は解決していると考えているようであった。他の班の「体が臭くなっている」という悩みに対しても、「歯ブラシで洗うよ」と解決案をつぶやいていた。ただ、授業後に水槽を覗いたB子は「うちのカメも臭い！」と他の班の



図2 イシガメを洗うB子

課題を自分事として捉え直す姿があった。第⑥時では、前時に出た各班の悩みを再度確認したときに「うちもー！」とイシガメの体のにおいについて共感する様子が見られた。それぞれの班で捉えている課題を解決する活動をスタートさせると「臭いー！」と何度も言い、マスクや手袋をつけながらも、「イシガメや水槽を綺麗にしないと死んじゃうから」と手を止めずに水槽やイシガメを洗う姿があった。臭いことや不衛生なことに躊躇したくなる気持ちとイシガメを死なせたくない気持ちの相反する気持ちの葛藤の中で、イシガメにとってよりよい方法を選択しにおいや不衛生さに立ち向かっていた。これまでB子は自分本位な関わり方でイシガメと接することが目立っていたが、毎日の世話をくり返す中で、命を扱っていることや、自分たちの飼育によってイシガメの命が左右されることを自覚したと考えられる。その後、日常の飼育の中でも進んで水換えを行うB子の姿があった。

このように対象であるイシガメとくり返し関わる中でB子はイシガメに対する思いを変容させ、自らはたらしかけるようになったと考える。

#### イ「イシガメを通して友達と関わる中で思いを受け止めたり、伝えたりするよさを味わう」

B子はイシガメの飼育を通して、友達の思いを受け止めたり、伝えたりする様子が見られた。第①時でイシガメと出会ったときは、班の友達に対して「班の形にして」のような「〇〇して」という一方的に指示をするような姿が多くあった。また同じ班のF男とは、イシガメに触る順番や、観察の仕方では意見がぶつかることが多かった。第④時の班での飼育をスタートして以降、水槽の中に石を置きたいF男の思いを「いいよ」と受け止めながらも、小さい石を置こうとしていたE男に対して「大きいのだけね、こういう小さいのは入れない」と断る場面があった。その背景には、前時までの調べ学習で読んだ資料から得た「大きい石を入れるべき」という彼女の考えがあった。しかし小さい石を入れた他の班の水槽や、その中でイシガメが小石でできた陸地に上がる様子を見て「おっきい石やめよう。少なくしよう」と考えを変容させ、E



図2-2 情報を共有するB子の班

男の思いを受け止め直す姿が見られた。追究外のある日の飼育の中では、世話を分担制にしたいと考えるF男に対し、「私も同じタイミングで分担制にしようと思っていた」と共感し、「みんなで分担制にした」と教師に報告する姿があった。E男との関わりが、イシガメの飼育を通して変容していると考えられる。同じ班の友達が忙しいときには「水換えしとくよ」「餌やりはお願いね」と率先して飼育に取り組んでいる。時間が足りず大変そうときもあるが、自らイシガメに働きかけ、飼育を楽しむ様子があった。同じ班の友達への関わりだけでなく、他の班の友達に飼育に必要な情報を集めるために「どうやって洗ってる?」「餌は食べてる?」と自ら関わる様子もあった。これまで同級生よりも上級生や大人との関わり



を好んできたB子だったが、イシガメを通して授業の時間に留まらず友達と関わり、日常の至る場面で友達の思いにふれたり、自分の思いを伝えたりすることになり、自分の思いを受け止めてもらえたり、友達の意見に納得したりする機会が増えたことがB子にとっての他者との関わりの幅が広がることにつながったのだろう。

他者との関わりの幅を広げることは、彼女の背景から考えても簡単なことではなかったはずである。それでも思いの実現に向かい続けたことは、B子にとっては粘り強さを発揮する場となっていただろう。このように、B子の中に芽生えた「イシガメをよりよく飼いたい」という思いの実現に向かう中で彼女は友達の思いを受け止めたり、自分の思いを伝えたりすることのよさを味わう経験ができた。

#### ウ「イシガメにとっての最適解を目指す」

第④時で飼育をスタートしたが、水槽の中の環境を作っていくときに水槽の中にペットボトルで作った小部屋や折り紙の飾りを置いたE男に対してB子は戸惑う様子を見せつつも受け入れていた。教師に「これって本当にイシガメのためになってる？」と聞かれ「分からない」と返事をする様子もあった。これまでの昆虫などの飼育と同じように自分にとって楽しいもの、おもしろいものを水槽の中に入れたという考え方に大きな変化は見られないようだった。普段の飼育を続けていく中で次第に折り紙の飾りや、ペットボトルで作られたものは外されていった。イシガメの様子を毎日見る中でイシガメにとって必要ないものだと気付いたのだろう。第⑤時で、それぞれの班の悩みを知り、自身の班のイシガメのにおいに気付いたB子は第⑥時で「臭い！」と言いながらも現状に目を背けず、イシガメや水槽を懸命に洗っていた。第⑦時では、これまで1か月の飼育について振り返る中でB子は、「最近、餌を食べる量が減っていて心配している。食べる量に合わせて餌をあげた方がいいと思う。朝に5粒、昼に5粒、帰りに8粒にして様子を見たい」という意見を発表していた。イシガメの様子に合わせた飼育をしようと試行錯誤する様子が見られた。普段の学校生活の中でも、イシガメの様子に目を向け、「汚れているから今日洗おう」と班の友達に声を掛けたり、下校前であっても水の汚れに気付くと水換えをしたりしていた。どうすればイシガメにとってよい飼育環境になるのかを吟味したり見つめ直したりしながら、飼育をしている。

これまで、飼育について自分本位な見方や考え方をもっている姿から、その対象にとっての最適解を見つけながら飼育をしようとする姿に変容している。その根本には「生き物を大切にしたい」という彼女の思いがあった。ペットボトルの小部屋や、イシガメの動きを楽しんでいたB子が日々の飼育を通して、今の飼育方法で本当にいいのか自問自答しながら状況を修正していったと考える。そのように、彼女は自分の背景や活動の中で生まれた見方や考え方をもとに、自分が目指したい飼育の在り方を吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かっていった。

#### 4. 生活科部が見出した『その子らしく学ぶ』研究の価値や可能性

～心の動きを伴う経験によってその子に還るものを視点として～

##### (1) 自分を軸とした学びによって得られる経験

対象と出合い、自分と対象との結びつきの中で『その子らしく学ぶ』子どもは、自分を軸とした活動をしていると考えた。私たちは生活科における『その子らしく学ぶ』を、「その子の背景や、活動の中で生まれた見方や考え方をもとに、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かうこと」と考えている。A男においてもB子においても、それぞれの背景や、活動の中で生まれた見方や考え方をもとにしながら、自分の「〇〇したい」という思いの実現に向かう姿が見られた。

例えばA男は、自身がつくる遊びとして目指すところを「ダイナミックであること」としていた。第①時から彼は、プラ段を大胆に傾けたり、友達と転がる距離を競ったりして、場を大きく使って遊んでいた。そのような彼が、自分のプラ段で遊びをつくる中でも、跳びはねたり、宙に浮いたりするような転がり方に楽しさを見出すことは「ダイナミックさ」に着目している点で共通しており、彼の求める遊びのイメージに一貫性があることを示している。また、彼にとっての「ダイナミックであること」の重

要性は、彼がそういった転がり方に出合った際の「僕のこだわりは、僕のこだわりは何と言ってもね！1番と2番の違いすぎてびっくりしちゃうくらいね、僕が気に入ってるのはね、この長細いやつ。(転がしながら)今は失敗しちゃったけど、ほんとにはね、ダイナミックなんだよ！すごいダイナミックにいけるんだよ！」という言葉に明確に表れている。

これ以降、A男は自分のつくる遊びが「ダイナミックであること」を目指してくり返し対象に関わっていった。途中、活動を共にするD男から様々な提案を受けるも、自身のこだわりである「ダイナミック」を損ないそうなものは断り、共存できそうな提案は受け入れていった場面にA男が自身の思いの実現を軸に据えていることが分かる。こうしてA男は、心の動きを伴って見出した思いの実現に向かっていった。その過程で、遊びの中身を吟味したり見つめ直したりすることはあっても、自分の思いに対しては迷うことなく誠実に取り組んでいた。

B子は、困難な目標への粘り強さをもって活動をしていった。イシガメとの出会いの場で彼女はカメを何度も触ってかわいがることに終始した。そこには家庭生活において高学年の姉やその友達にかわいがられたり、小さい妹と遊んであげたりしている彼女の背景が影響していると考えた。ところが、自分の想像していたような楽しさがカメに通じないことに気付いた彼女は、カメにとってよりよい飼育環境や飼育方法を見つけようと動き出していった。自分がグループの中心となって友達に働きかけ、カメにも自ら進んで何度も関わっていった。そこには、友達との関わりによさを感じてほしいという教師の願いにも通ずる姿があった。ここに至るプロセスにおいて彼女は、カメや水槽の水が臭くなっていることに気付くと、世話を欠かさずに行ったり、休み時間の遊びを断って水換えをしたりしてきた。これらは、本来、彼女にとっては不都合な出来事であり、相反する気持ちの葛藤の中で自己コントロールをしていることが考えられる。そして生き物を世話することの難しさや、命を扱うことの責任の大きさを味わいながら今も飼育活動を継続している。「イシガメをよりよく飼いたい」という自身の思いの実現に向かって、粘り強さと熱量をもって活動してきたことは、虫の飼育を途中でやめていたこれまでの彼女にとって価値ある経験であるといえるだろう。

『その子らしく学ぶ』ことの価値の一つに、こうした自分を軸とした学びが展開される点を挙げたい。そして、そのプロセスの中で子どもが誠実性やグリット(困難な目標への情熱と粘り強さ)、自己コントロールといった非認知能力に含まれる力をはたらかせる経験をしていることが分かった。こういった経験を重ねることは、材や友達といった対象との関わりから生まれる気付きの質の高まりに加え、その子が日常の生活を豊かにしていくことに寄与していると考ええる。

## (2) <自分と材>の関わりと<自分と他者>の関わりの往還の中で、

『その子らしく学ぶ』はさらに進んでいく

研究3年次の2人の抽出児を含め、多くの子どもが好奇心をもって材と関わっていた。それは、「知りたい」「やってみたい」と子どもの心が動くような、身近で魅力的な材や、その材にくり返し関われる環境を設定することができた教師側の成果であるといえる。同時に子どもにとっては、その子の背景が影響したり、その子の見方や考え方がにじみ出たり、それらが発揮されたりしながら対象と関わることにつながり、思いの実現に向かう中で気付きを得ていく様子が見られた。そうして学びを進めていく中で、共に学ぶ友達との関わりが数多く生まれ、それによって自分にはない見方や考え方にふれたり、新たな思いをもったりする姿があった。低学年の段階にある子どもは、その多くが自分のはたらかせる見方や考え方を認識したり、自分にはない見方や考え方を意識的に探したりしているわけではないだろう。しかし<自分と材>の関わりが十分になされているからこそ、友達との関わりの中でその子のフィルターに引っかかるものが生まれ、センサーが反応するように「この方法を取り入れよう」「そうすれば自分の『〇〇したい』にもっと近づけられそうだ」と思考の加速や対象との結びつきの強まりにつながっていくのではないだろうか。例えばA男が友達の得点のアイデアを自分の遊びに取り入れたり、B子が他の班の様子を参考に、水槽の中に入れる石の大きさを変える判断に至ったりしたように、<自分と他者>の関わりの中で新しい見方や考え方に出会い、自分の思いを更新したり強くしたりしていく姿があった。そ

の姿は、その子が『その子らしく学ぶ』ことが土台にあってこそ引き起こされるものであり、＜自分と材＞の関わりと＜自分と他者＞の関わりの往還の中で、『その子らしく学ぶ』はさらに進んでいくのではないかと考えた。

### (3)子どもが立ち止まり、やりたいことを吟味したり見つめ直したりするきっかけを生むような

#### 教師のかかわりと授業デザイン

「ピンポン玉パーク」と「イシガメを育てる、守る、楽しむ」の両実践において、それぞれの抽出児は「〇〇したい」という思いを明確にもち学ぶ様子が見られた。A男もB子もつぶやきや記述で思いを表出することが多かった。それに対して教師はそれぞれの思いを支えられるようかかわっていった。しかし、本当に教師がA男やB子の「〇〇したい」という思いを受け止め、彼らを支えるためのかかわりができていたかについては再考したい。

「ピンポン玉パーク」の実践では、A男が大切にしていた「ダイナミック」が単元の進む中で徐々に強く明確なものへと変容していった。教師はA男のやりたいことが「ダイナミック」であることをとらえ、それを支えようとかかわっていった。しかし、そのかかわりが却ってA男の思考を止めていた可能性がある。A男がどんなことを考えて作っているのかを知るためにピンポン玉パークの制作に夢中になっているA男に対して「今どんな感じ?」「おすすめは?」と教師が声をかける場面があった。A男は「ここがA男ゾーン」「おすすめはここだよ!」と自分の作ったものを熱弁していたが、その時間は手を止め説明に夢中になっていた。A男がやりたいことに向かって進んでいる中で、教師はA男のやりたいことを一旦止めているのだが、その説明の後にA男の活動に変容は見られず、「ダイナミックにしたい」というA男の思いを支えることができていなかった。A男が自分の思いをより強く明確なものにしていけるような提案や問いかけがあることで、A男がやりたいことを吟味したり見つめ直したりする機会が保障されやすくなると考える。

「イシガメを育てる、守る、楽しむ」の実践においては、第⑤時でこれまでの飼育を振り返る中で、教師はB子に対して、自らの力で本当にイシガメのためにできることが何なのかを考えてほしいと願ったが、現状の飼育方法や飼育環境に満足していたB子が立ち止まって考えるきっかけになるようなかかわりをすることができなかった。教師側には、水槽の汚れやイシガメのにおいなどB子に気付いてほしい点があるものの、そこにB子の意識が向くような問いかけができていなかった。結果的に、友達との関わりから水槽やイシガメの汚れ、においに気付き、新たな課題を自ら見出していったB子ではあるが、そこに教師の直接的なかかわりの影響は少なかった。声をかけることや見守ることは、そのきっかけやタイミングが重要であるはずだ。その子がやりたいことを吟味したり見つめ直したりすることができるように、教師はそのタイミングを見極め、適切にかかわっていく必要がある。研究3年次はどちらの実践においても、45分間の授業の中で、その子の「いま」ととらえることに対して課題が残った。またとらえていても適切にかかわることができなかった。その要因の一つとして教師自身の中に迷いがあったことが挙げられる。生活科の授業においては、やりたいことを吟味できるような材を選んできたが、その材を使ってただ活動しているだけではその子の学びが深まらないこともある。その子の「〇〇したい」をもっと的確にとらえ、学びが深まるためのかかわりをするためには、その子がやりたいことを吟味したり見つめ直したりする瞬間が損なわれないよう、教師自ら研鑽を重ね、子どもの関心事を学びにつなぐ授業デザインをしていく必要があるだろう。

## 5. おわりに

わたしたち生活科部では、「その子の背景や、活動の中で生まれた見方や考え方をもとに、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かうこと」を『その子らしく学ぶ』具体的な姿として、実践を行ってきた。2人の抽出児のプロセスからは、自分を軸にしてくり返し対象と関わる中で思いの実現に向かう姿を見ることができた。その中で「心の動きを伴う経験」によって「〇〇したい」という思いが強く明確になる様子があった。また、他者との関わりの中で、自分にはない見方や考え方

にふれ、自分の見方や考え方を広げたり深めたりする様子もあった。その姿からも「その子の背景や、活動の中で生まれた見方や考え方をもとに、やりたいことを吟味したり見つめ直したりしながら思いの実現に向かうこと」が生活科の学びを得ることにつながっていると再確認することができた。

2つの実践から研究3年次では、2人の抽出児が『その子らしく学ぶ』プロセスの中に、その子のもつ非認知能力をはたらかせる経験があることを見出すことができた。その経験と同時に教科の学びとおける気付きの質が高まっていく様子があり、我々教師としてもそのよさを感じることができた。これからの生活科の実践においても『その子らしく学ぶ』子どもの姿を支えられるよう研究の価値をより明確にしていきたい。